



夏井いつき氏 選評

天 やどかりや瓦礫ゆらめく潮だまり

上「やどかりや」の詠嘆は、小さな生き物だけでなく、柔らかな春光、春の潮の匂いまでも想像させます。やどかりがいたのは潮だまり。覗き込めば、ささやかな水面に瓦礫の影がゆらめいています。かつての災害を想起させる「瓦礫」の一語。再びおとされる春を、やどかりは希望の象徴のように健気な命を繋いでいるのです。

地 堤防は長城春の海隔て

前半の表現は、震災を乗り越え、復興の象徴のように高々と建設された堤防を、中国の万里の長城になぞらえたのでしょうか。あるいは、「万里の長城」と呼ばれていた田老の防潮堤を思っているのかもしれませんが、後半に出現するのは、長閑な春の海。「隔て」と続くのびやかな調へには、万感の思いが込められているようです。

人 福島へ帰らう桃の甘き地へ

福島からの避難生活を余儀なくされている人でしょうか。あるいは、福島の復興を心から願ひ、第二の故郷として心を寄せている人かもしれません。桃の季節になると、福島への思いはますます深くなります。「福島へ帰らう」という歌は、「桃の甘き地へ」という賛歌が、読者の心に、福島の人たちへはるばると響く応援歌です。

帰還断念十五年目の小鳥来る

「断念」したのは、今なお避難指示が継続されている帰宅困難区域への帰還なのでしょう。とはいえ、「十五年目の小鳥来る」には、十五年という月日の経過と、復興の難しさだけではなく、希望も託されているようです。毎年日本に渡ってくる鳥の姿には、将来必ず我が家へ帰還する人たちの姿が重ねられているに違いありません。

被災地のたそがれ長し月見草

月見草が咲く頃には、被災地の夕暮れも長くなっていくという素朴な感慨でしょう。か「たそがれ」の二語を「盛り過ぎて終わりに近づこうとする頃」と捉えるなら、終わるようで終わらない復興への道を「長し」と詠嘆しているのかもしれない。眼前の月見草は、慰めるように励ますよう、灯のような花を咲かせ始めるのです。

入選 十九夜さまに詣てませう月上る

- 瓦礫から南瓜の蔓は青々と
瑞巖寺ぼんと大きな甲虫
菜の花やひんがし未だ燃えてゐる
春月や仮設住宅団地の湯
虎舞ひの裾は地を這ふ綱雲
黙禱の目蓋に揺れる冬の海
はまぎくや齢十五の墓の石
庁舎から鉄骨の声永久の春
野馬祭終えて甘える馬となり

41都道府県から届いた被災地への思い

当コンテストの選者は、夏井いつき先生と、もうお一方は東日本大震災の被災3県の俳人の先生方が持ち回りでお引受け下さっています。今回は岩手の照井翠先生です。先生は岩手県花巻市生まれ。高校で国語科教師として勤務する傍ら、加藤楸郎氏に師事。震災の際は釜石市で避難所生活を送り、句集「龍宮」・エッセイ集『釜石の風』・句集『泥天使』の「震災3部作」を上梓。石碑ならぬ「紙碑」とご本人がおっしゃるように震災の貴重な証言となっています。
実は今回は454名、2118句(普段の1.5〜2倍)のご応募を頂きました。先生方の選句作業もご苦労されたことと思われまします。
そんな中、松山市の久保哲也さんから、ねぎらいの1句が届きました。「菜種時く里山閑か熊寝たな」。こちらは珍しい回文の俳句で、「里山閑か」をさみ、上から読んで下から読んで同じになるのです(お見事!)。東北ばかりではありません、本当に熊に翻弄された1年でした。皆様、お疲れさまでした!そして、ありがとうございます!

(東北お遍路プロジェクト代表・新妻香織)

岩井 辛夷(岩手県一関市)

上田 望(大分県由布市)

越智 空子(愛媛県東温市)

佐藤 節美(福岡県北九州市)

野崎 真奈美(兵庫県宝塚市)

- 半田 真理(栃木県宇都宮市)
田中 恭秀(岐阜県岐阜市)
巧 大知(大阪府大阪市)
石村 まい(兵庫県加古川市)
山城 道霞(兵庫県三田市)
高橋 也有子(福島県伊達郡)
岩中 幹夫(岡山県玉野市)
岩橋 宣輔(岡山県岡山市)
有吉 一行(岡山県赤磐市)
横山 光幸(福島県郡山市)

選外作品五十句(照井 翠選)

- 東北の遍路は哀しき参り
「忘れぬ」刻む石碑や鳥渡る
背におす春風やさし遍路旅
春の星震災遺構に眠る夢
鳥帰る天のほころび縫うように
東北の前むく力夏祭り
秋祭り復興神輿に力こぶ
復興のシンボル春をひた走る
やどかりや瓦礫ゆらめく潮だまり
無声映画の如き海なら二月尽
そさすはれぬまつてけるじやと秋の浜
塩サイダー溢れ田老の海の泡
天を突く避難階段風死せり
流灯を波無き水に浮かべたり
シオラマに平和な暮し夏うぐひす
遺されし手帳の癖字つばくらめ
北風 三風(北海道北見市)
西尾 謙(北海道小樽市)
山口 京子(北海道帯広市)
藤林 正則(北海道札幌市)
山本 美和(北海道札幌市)
田中 ひろ子(青森県八戸市)
藤井 了(岩手県釜石市)
天沼 雅子(岩手県盛岡市)
岩井 辛夷(岩手県一関市)
及川 智子(岩手県盛岡市)
小原 幸(岩手県盛岡市)
工藤 幸子(岩手県盛岡市)
伊藤 恵美(岩手県盛岡市)
佐々木 清志(岩手県北上市)
大信田 宏子(岩手県盛岡市)
古川 制子(岩手県盛岡市)



照井翠氏 選評

天 語り部は未来も語り春の雲

震災当時のことを、相当の覚悟をもって「語る」ことを決意した語り部。時が経ち、次第に世の関心も薄れていくなか、語り部の役割も変化しているだろうし、その活動はますます貴重なものになっている。この句、「未来も語り」が胸に響いた。被災地の未来を見据え、前を向く語り部の姿を見守っている春の雲の優しさも良い。

地 一本の杖のみしやべる冬遍路

寒さの厳しい冬のお遍路の一場面を生き生きと描いている。寒さや心細さ、寂しさを紛らせようというのか、偶然出会ったお遍路同志が助けにおしやべりしているのだろう。自らの体験や遍路宿の情報など話題には事欠かない。「二本の杖のみしやべる」という究極の省略が実に見事。本当に杖がしゃべり出しそうだ。

人 春濤の美しや胎内仏を秘め

たぶん作者は被災地の春の海に来ている。震災時は荒れ狂った海も、普段はいたって穏やかで、浜に打ち寄せる波も岩に砕ける波も本当に美しい。浜辺にたたずむ作者は、あの日津波に呑まれ沖へと流された多くの方々の恐怖や無念に思いを馳せる。亡くなられた方々を大海原の「胎内仏」と捉え得た作者の鎮魂の思いの深さ。

三一一記憶の毛糸編み直す

私自身、釜石市内の勤務先で震災に遭遇し、そのまま避難所生活に入った。食べるものも無く、着の身着のまま寒さに震えていた。水分はいざとなれば雪を口に含めばよかった。あの震災は終わらない。誰もが各々の「記憶の毛糸」を何度も何度も「編み直す」ことになる。「あれはこうだったろうか」「いや違う」と糸をほどく。

啓蟄の穴みな息をしてゐたる

厳しかった冬の寒さも和らぎ、日一日と暖かさを感じる時期、冬ごもりしていた虫たちが土の中から地上に這い出てくるのが「啓蟄」。その穴が皆「息をして」と感じ取った作者の念頭には、「息をしていない」「死んでいる」存在もあつただろう。生命力溢れる啓蟄の穴に焦点を当てつつ、死をも視野に入れている。

入選 漆黒の被曝の牛や月朧

- 揺れやまぬリアスの駅の貝風鈴
残り世は祈ることのみ三月来
花びらの濡れて貼りつく一本松
稔り田に除染土積まれ14年
狐火は原子力では灯せまい
祈りの手泥より春を引き抜きぬ
春の雪忘却という白き嘘
まくなぎを払えばセメント色の故郷
木枯らしか帰らぬ人を呼ぶ声か

細井 昂(岩手県盛岡市)

- 村井 康典(岩手県盛岡市)
島 文庫(宮城県仙台市)
阿部 澄江(宮城県大崎市)
新井 結喜(宮城県仙台市)
石の森 市朗(宮城県石巻市)
草野 光夫(宮城県仙台市)
南部 努(宮城県仙台市)
針生 きよみ(宮城県仙台市)
川名 まこと(宮城県仙台市)
前田 悦郎(宮城県仙台市)
浅野 理恵(福島県郡山市)
桑原 秀美(福島県郡山市)
齋藤 正道(福島県伊達市)
荒 拓見(福島県新地町)
渡部 裕子(福島県新地町)
村越 知枝(福島県郡山市)

工藤 富江(福島県郡山市)

遠藤 幸子(群馬県高崎市)

片山 千恵子(岩手県矢巾町)

千田 康司(宮城県石巻市)

曾根 新五郎(東京都練馬区)

- 藤林 正則(北海道札幌市)
沖田 誠子(岩手県一関市)
片平 奈美(宮城県仙台市)
齋藤 伸光(宮城県仙台市)
矢部 伸子(福島県須賀川市)
大淵 貉(新潟県小千谷市)
三枝 侑子(神奈川県横浜市)
栗田 侑希哉(静岡県掛川市)
久保 哲也(愛媛県松山市)
上田 望(大分県由布市)

- 野馬追や家路の騎馬に手を合わす
赤蜻蛉津波の高さ示す杭
盆踊り影を探して踊りけり
海鳴りは亡き人の声里神楽
三月の小さき地蔵へ小さき石
鈴が鈴追ひ越してゆく遍路かな
松島の欠けたる海に月の道
春灯や地蔵にない町たずねゆく
もてなしは庭の生り物秋遍路
ここに居るまだここに居る星月夜
三陸の海に祈りて春の月
あの津波夢と希望は残してた
春風に祈りを込めて未来を描く
復興へ汗と涙とせみの声
黙禱の目蓋に揺れる冬の海
みちのくのお遍路の道花のうみ
海鳴りを鎮めし松を秋遍路
横山 光幸(福島県郡山市)
竹淵 昭彦(群馬県前橋市)
青山 将司(東京都杉並区)
小林 和子(東京都練馬区)
松尾 恵利花(千葉県千葉市)
木村 隆夫(埼玉県さいたま市)
森屋 多美子(埼玉県東松山市)
新川 はるか(神奈川県横浜)
吉沢 道夫(長野県長野市)
河原 仁志(富山県射水市)
磯元 美宇(兵庫県神戸市)
崎崎 信平(兵庫県神戸市)
大橋 果穂(兵庫県神戸市)
齋藤 悠乃(兵庫県神戸市)
岩中 幹夫(岡山県玉野市)
高原 伸安(岡山県和気町)
古山 礼子(広島県東広島市)

【第10回東北お遍路俳句コンテスト作品募集!】 ■ 題:自由題、ただし東日本大震災の被災地を思う俳句 ■ 応募期間:2026年9月30日(消印有効) ▶ 作品の送り先:〒976-0022 福島県相馬市浜尻字南ノ入241-3 東北お遍路コンテスト係

【東北お遍路俳句・写真コンテスト賞品当選者】 ●被災地うまいもの1万円分(2名) 俳句の部:岩井辛夷様/写真の部:高橋達也様 ●被災地うまいもの5千円分(4名) 俳句の部:工藤富江様、遠藤幸子様/写真の部:柏館健様、市川清一様 ●被災地うまいもの千円分(20名) 俳句の部:上田望様、越智空子様、佐藤節子様、野崎真奈美様、片山千恵子様、千田康司様、曾根新五郎様、藤林正則様、田中恭秀様、石村まい様/写真の部:西山栄様、丹治郁夫様、門林泰志郎様、佐々木均様、柏館光子様、岸浩子様、藤島純七様、南澄様、門林美津江様、小曾根嵩様

俳句は東北お遍路プロジェクトHPからもご応募可能です。



夏井いつき氏 選評

天 やどかりや瓦礫ゆらめく潮だまり

岩井 辛夷（岩手県一関市）

上五「やどかりや」の詠嘆は、小さな生き物だけでなく、柔らかな春光、春の潮の匂いまでも想像させます。やどかりがいたのは潮だまり。覗き込めば、ささやかな水面に瓦礫の影がゆらめいています。かつての災害を想起させる「瓦礫」の一語。再びおとずれる春を、やどかりは希望の象徴のように健気な命を繋いでいるのです。

地 堤防は長城春の海隔て

上田 望（大分県由布市）

前半の表現は、震災を乗り越え、復興の象徴のように高々と建設された堤防を、中国の万里の長城になぞらえたのでしょうか。あるいは、「万里の長城」と呼ばれていた田老の防潮堤を思っている措辞かもしれません。後半に出現するのは、長閑な春の海。「隔て」と続くのびやかな調へには、万感の思いが込められているようです。

人 福島へ帰らう桃の甘き地へ

越智 空子（愛媛県東温市）

福島からの避難生活を余儀なくされている人でしょうか。あるいは、福島復興を心から願って、第二の故郷として心を寄せている人かもしれません。桃の季節になると、福島への思いはますます深くなります。「福島へ帰らう」という吹き、「桃の甘き地へ」という賛歌が、読者の心に、福島の人たちへはるばると響く応援歌です。

帰還断念十五年目の小鳥来る

佐藤 節美（福岡県北九州市）

「断念」したのは、今なお避難指示が継続されている帰宅困難区域への帰還なのでしょう。とはいえ、「十五年目の小鳥来る」には、十五年という月日の経過と、復興の難しさだけではなく、希望も託されているようです。毎年日本に渡ってくる鳥の姿には、将来必ず我が家へ帰還する人たちの姿が重ねられているに違いありません。

被災地のたそがれ長し月見草

野崎 真奈美（兵庫県宝塚市）

月見草が咲く頃には、被災地の夕暮れも長くなってくるという素朴な感慨でしょうか。「たそがれ」の一語を「盛りを過ぎて終わりに近づこうとする頃」と捉えるなら、終わるようで終わらない復興への道を「長し」と詠嘆しているのかもしれない。眼前の月見草は、慰めるように励ますよう、灯のような花を咲かせ始めるのです。

入選 十九夜さまに詣てませう月上る

半田 真理（栃木県宇都宮市）

瓦礫から南瓜の蔓は青々と
瑞巖寺ぼんと大きな甲虫
菜の花やひんがし未だ燃えてゐる

田中 恭秀（岐阜県岐阜市）

春月や仮設住宅団地の湯

石村 まい（兵庫県加古川市）

虎舞ひの裾は地を這ふ罽雲
黙禱の目蓋に揺れる冬の海

山城 道霞（兵庫県三田市）

はまぎくや齡十五の墓の石

高橋 也有子（福島県伊達郡）

庁舎から鉄骨の声永久の春

岩中 幹夫（岡山県玉野市）

野馬祭終えて甘える馬となり

岩橋 宣輔（岡山県岡山市）

有吉 一行（岡山県赤磐市）

横山 光幸（福島県郡山市）